

岩手医科大学歯学会第17回例会抄録

日時：昭和59年2月25日（土）午後1時30分

会場：岩手医科大学歯学部C棟6階講義室

演題1. 歯原性嚢胞に出現する hyaline-body の走査電顕所見ならびにX線微小分析所見について

○武田 泰典, 守田 裕啓, 鈴木 鍾美,

岩手医科大学歯学部口腔病理学講座

歯原性嚢胞に特異的に出現する hyaline-body の由来については種々のものが挙げられている。演者らは従来より hyaline-body は歯原上皮の分泌により生ずるとの説を支持し、埋伏歯の二次歯小皮と hyaline-body が連続的に移行している事実を発表してきた。今回は hyaline-body の立体構築と構成成分を検索することを目的として、臼歯性嚢胞にみられた hyaline-body についてエネルギー分散型 X線微小分析装置と走査型電顕を組み合わせて検討を加えた。その結果、光顕あるいは透過電顕でみられる hyaline-body の層状構造は走査電顕では明瞭でなかったものの、hyaline-body の表面は非常に微細な板状多層構造を呈していた。また、hyaline-body と周囲上皮細胞は非常に強固に結合していることを示唆する所見が得られた。X線微小分析所見では hyaline-body は主として P, S, Ca, Fe の元素より成ることを示していた。なお、点分析、面分析、走査 X線像のいずれにおいても、これらの元素は hyaline-body 全体にはほぼ均一に分布していた。

演題2. マウス舌下腺における顆粒管細胞の出現と加齢に伴う変化について

○坂倉 康則, 石関 清人, 立花 民子,
名和 橙黄雄

岩手医科大学歯学部口腔解剖学第二講座

顆粒管は長い間齧歯類顎下腺に特徴的な構造と考えられてきたが、最近マウスの舌下腺線条部にも顆粒管細胞と同様に抗 Epidermal growth factor (EGF)

親和性を示す細胞が出現することが報告された。しかし、舌下腺の顆粒管細胞の出現と aging の関係やその微細構造については検討されていない。我々は、生後7週, 12週, 7カ月, 9カ月および1年以上を経過した BALB/C 雄性マウスを用い、舌下腺における顆粒管細胞の出現と微細構造を顎下腺のそれと対比して観察した。顆粒管細胞の同定は光顕ではブアン液または4% paraformaldehyde 固定, パラフィン切片における抗 EGF 親和性と PTAH 染色によった。抗 EGF 親和反応は peroxidase 標識酵素抗体法により可視化した。一方、電顕的には glutaraldehyde-OsO₄ 二重固定後の Epon 切片を通常通り二重染色し、線条部内にみられる大型の分泌顆粒を含む細胞を顆粒管細胞と同定した。また、この細胞における EGF 局在を2% paraformaldehyde-0.5% glutaraldehyde 混液固定 Epon 包埋超薄切片に対する Protein A-Gold 法により検討した。舌下腺顆粒管細胞は生後7週の個体では全く同定されなかった。この時期の顎下腺では線条部内に抗 EGF 親和性の細胞が多数存在するが、まだ顆粒管の発達は十分ではない。生後12週では観察した全ての個体の舌下腺に抗 EGF 親和性の顆粒管細胞がみられた。顆粒管細胞は線条部内に散在しており、連続した管は形成しないが、管の断面の一部がこの細胞のみからなる像もみられた。生後7カ月以降では、舌下腺内に顆粒管細胞の出現する個体と全く識別されない個体とがあり、例え顆粒管細胞が出現してもその数は極めて少数であった。顎下腺の顆粒管はこれらの時期にもよく発達していたが、同一 age でその発達度合に個体差がみられ、顎下腺の顆粒管の発達度合と舌下腺における同細胞の出現の有無との間には正の相関がみられた。舌下腺の顆粒管細胞の微細構造は顎下腺のそれと大差なかったが、抗 EGF 親和性には顆粒の大きさと電子密度によって差異がみられた。

演題3. マウス顎下腺細胞質におけるアンドロゲン・レセプターに及ぼす去勢ならびに性ホルモンの影響